



連載
博聞意伝

世代を超えて未来を語る

②

第2回

副島 晃

——
澁澤 健

〔聞き手〕

〔元興銀常務〕

〔日本国際交流センター 理事長〕

日本人の社会性

澁澤 奥村有敬さんの跡を受けて、新しい連載対談「博聞意伝」を担当しています。第一回の奥谷禮子さんに続いて、副島晃さんに第二回目にご登場いただきました。対談の副題を「世代を超えて未来を語る」としてあります。最近、私よりも若い方が入ってこられました。『ほぼづ』の同人の中ではま

だまだ私は若手の方であり、先輩の皆さん方の体験、お考えをメッセージにして、私を通じて次の世代へ伝えることが出来ればと考えております。いわば、子や孫に語り聞かせるメッセージとでも言いましようか。

副島 それは大事なことです。私も二人孫がいて、男の子は大学で勉強をしています。女の子の方は、父親が自動車会社に勤めていた関係で、長く外国にいました。

澁澤 帰国子女ということですね。そうしたお孫さんと語られる機会はおありですか。

副島 こちらは可愛くてしようがないのですが、向こうはあまり歓迎していませんね（笑）。

興業銀行や富士重工にいた現役時代には、若い人たちと話すことも多かったのですが、最近は交流があるといっても、ほとんどが五十代以上ですね。

ただこういうことがあります。ちょうど五年前の十一月です。自宅のそばにゴルフの練習場があ

り、予約した時間に間に合うようにと急いでいたら、雨が降ったせいもあって滑って転んでしまいました。その上、歩道の脇の、鉄の柱に脛をぶつけて骨折してしまいました。立とうとしても立てなくて、……そうこうしているうちに、若い男性が近づいて来て、「どうなさいました？」と声を掛けてくれました。「骨を折ったらしくて、どうにも立てないんですよ」と言ったら、脇を抱えて起こしてくれて、近くのベンチまで運んでくれました。そして、携帯電話で家内を呼び出し、救急車も呼んでくれました。私は「お名前を聞かせて下さい」と頼んだのですが、「こういうことは誰にでもあることですから」と言っていて、行っていました。それが実に爽やかでした。そのことがあってから、私は「今どきの若い人は……」などとは一切言わないことにしています。

家内と地下鉄に乗った時など、若い人たちが立って、席を譲ってくれます。そして家内が坐ろうとしていると、その隣の人が私にも席を譲ってくれて、



つくづく日本人は優しいなと思うことがあります。

澁澤 近年、日本人のそういった面が失われた、とよく言われていますが、そうでもないということでしょうか。

副島 そうした日本人の優しさというのは、この国が島国で、異民族の侵入がほとんど無かったことと、四季もそれぞれ美しく豊かだという環境によるのではないのでしょうか。短絡的かも知れませんが。

するようにと、口うるさく言っていますが、効果のほどは分かりません。ただ、言われ続けた効果が外に出た時に現れてくれればと思います。(笑)

先程、お孫さんとお話しされる時、あまり歓迎的ではないということでしたが、そういう折にはどのようなお話をされるのですか。

副島 いま、息子夫婦と先程お話した理学部に通う二十歳の孫が一階に住んでいます。孫が小さい頃は、袋におもちやを詰め込んでよく二階に遊びに来ていました。可愛くてね。ただ、小学高学年を過ぎる頃から来なくなりましてね。なんとか誘う手だてはないかと嫁とも相談したところ、「じゃあ時々晩御飯をご一緒にしましょう」ということになって、二週間に一度二階に上がってくるようになって、その時に戦争中のこと、外国に住んでいた頃の話などをしますよ。

澁澤 私は父方の祖父は知りません。父がまだ少年の頃に亡くなっていて、母方の祖父は医者で東京に

澁澤 私の周辺でもこのようなことがありました。やはり雨の日だったので、私の妻が、渋谷の東急の前のパン屋さんに行こうとしていた時、何処からか駆けて来た人が滑って転んだ、往來の只中で。そして、すぐに近寄って「大丈夫か、怪我は無かったか」と声を掛けたのは、二人の外国の女性だったそうです。周りには大勢の人が雨宿りして居たのですが、若い男の人も居たのだそうですが、ただ傍観していたということでした。

副島 若い人たちに社会的配慮が足りないこと、コミュニケーションの不足がよく問題になりますね。

朝会っても「おはよう」と言わないとか、人とも会っても「こんにちは」と言わないとか。それがストレスになって、どこかおかしくなるという、そういう場合が結構あるのだろうと思いますね。

澁澤 挨拶ということを、意識的にしなくなってきましたね。我が家は、小学校六年、五年、三年の男の子ですからほとんどカオス状態ですが、挨拶は

帰って来る度に訪ねていました。祖父のことは色々記憶に残っています。祖父と祖母の性格の違い、コントラストがありました。祖父は穏やかな人柄で、怒ったところを見た記憶がありませんでした。だから、自分が何かでカーツとなりそうになったり、身辺が散らかったりしてくると、「ああ、じいちゃん、こうではなかったなあ」と思う時があります。

副島 今の家はもともと親に階下に住んでもらって、自分たちが二階に住むという形で設計をしました。もう三十年以上昔になりますかね。それで親が亡くなって、息子夫婦に一階に入ってもらったのです。

今の日本の家族もそういう形で落ち着け方がいいのでしょうか、家族として纏まるということが難しい時代になってますね。一つには、戦後に長子相続の制度がなくなったことも影響しているでしょうね。

澁澤 私も、祖父母、親子三代で暮らすことの大切さは実感しております。



日本の心―家族制度・文化

副島 話が少し変わりますが、大正時代に永井荷風（一八七九―一九五九）という小説家がいまして。彼は日本の古い家族制度の単調さに嫌気がさして、海外に憧れたといわれています。「あめりか物語」「ふらんす物語」などは彼の青春の書です。かといって日本を離れてしまうと、今度は日本を恋しく思う。そして、日本に戻って来て、江戸末期から大正の頃までの爛熟した社会文化にまた惹かれて行く。荷風の小説でいうと「腕くらべ」がそうですね。それから「遷東綺譚」、これなどは古い江戸の情緒とか、人情世相などを書いていて面白いですね。

つまり、日本という国は、文化の爛熟した江戸時代が終わって明治の強直の時代となり、そして大正になって緩むんですね。それから昭和の初めまでその世相が続きますが、昭和十二年の盧溝橋事件から戦争の時代に入っていきます。私も幼かったのでよ

いることでも分かるのだろうと思います。先程の永井荷風と同時代に、金子光晴（一八九五―一九七五）という絵が好きな詩人がいました。この人も東アジアからヨーロッパを放浪して歩いていますが、オランダで友達が出来てベルギーのブリュッセルにしばらく滞在しました。彼は「西洋の文化には石と鉄の文明の深い伝統がある」「フランドル派のレンブラントの絵にしても石と鉄が基本だ」と言っています。

く覚えていくわけではありませんが、当時は二・二六事件や盧溝橋事件があったにしても、まだまだで小春日和のような時代だったと思います。社会的に落ち着いていて、国際面で言っても日英同盟を破棄し国際連盟を脱退して戦争へと傾斜しながらも、子供心に日本は良い国と思っていました。精神的に豊かな時代でしたね。

澁澤 そのようにして振り返って見た時に、大正時代というのは、日本の当時の歴史上、最も豊かであった時代だったと言えるでしょうね。「大正デモクラシー」という言葉が残されているように、国民一人一人が自由な意識という理想が芽生えた時代だったのでしたが、気が付いてみたら、その後は「黄金の時代」ではなくて「戦争の時代」に突入して行った訳ですから。すると、豊かさとは一体何なるだろうと思ってしまう。

副島 そのあたりが難しいところですが、精神的な豊かさというのは、当時色々な芸術が盛んになって

じゃあ日本は石と鉄に対して何で対抗できるのか、ということが金子の関心事だったようですね。

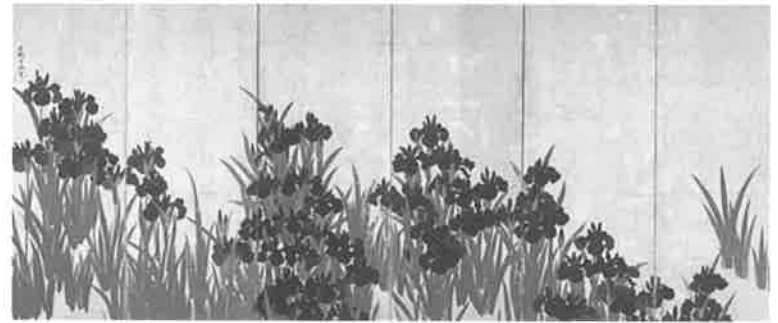
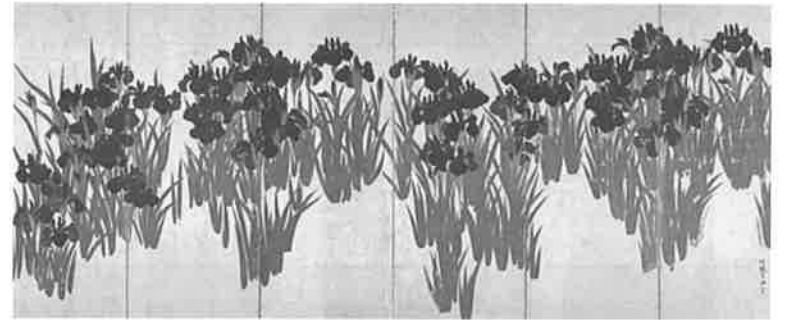
尾形光琳（一六五八―一七二六）という絵描きがありますが、「燕子花図屏風」（根津美術館蔵）という作品があります。この作品は文字通り金地を施した紙本の屏風に水溶の顔料で描かれています。濃紺の燕子花の花に、濃緑の葉。そして水や橋は一切描かれていない。水や橋は観る人がそれぞれ想像して下さい、という絵なのです。だから、金子光晴が言っているのは、日本で石と鉄の文化に対抗出来るのは尾形光琳の絵のように、つまり「水と木（紙）あるいは水と竹」ということなのでしょうね。それと、安藤広重（一七九七―一八五八）などの伝統版画ですね。これは、明治以降比較的早くヨーロッパに伝えられて、関心を集めていましたし、当地の芸術に充分対抗出来るものとして、金子などは考えていたようですね。ただ、金子光晴はその後になって「そうした、日本の誇るべき芸術文化の盛期は過ぎてしまった」「だ

です。……「そうなのか」と感心せざるを得ない時などは悔しいですね。だからきちんと知つとかなんといけないなという思いはありますね。

副島 外国で長く暮らした孫と、帰国してすぐ話をしたら、日本の歴史や漢字をあまり知らないのですよ。その後随分努力したようで、今はすっかり日本通になりましたが……。読書は今でも英語の方が楽なようです。

澁澤 私の場合は日本語の方が楽かもしれないですね。なぜなら、書くのは日本語の場合大変なのですが、漢字の意味するところの表現が広くて豊かなので、日本語の方がいいですね。だから、同じ内容の文書を、英語と日本語で現わすとすると、日本語の方がはるかに短く簡潔に綴ることが出来ますね。

副島 『ほほづゑ』同人の櫻井(修)さんがよく言われることですが、外国映画の日本語の字幕が仮名交じりの漢字で書いてあって、実に読み易い。あれが他の言語だったらのみ出してしまいます。漢字の



尾形光琳作「燕子花(かきつばた)図屏風」(根津美術館蔵)

現わす表現力ということでしょうか。

澁澤 私はアメリカで大学を卒業したのですが、それまでは、親は日本語で話し掛けてきて、それには英語で答えていました。妹が二人いるのですが、妹たちとは英語で会話し、友人とは当然英語です。それで大学を卒業して日本の社会に戻って来た時は「帰国子女」状態だったのですが、読むことはなんとかなりました。それはアメリカにいる時、船便で送られてくる日本の漫画を読んでいたこともあって、絵柄を見ながら文字で意味を解するという習慣が出来たのだと思いますが、書くことは駄目でした。ですが、八〇年代末の革命的な出来事、ワープロの普及が大きかったですね。ローマ字で入力して変換すると漢字仮名交じりの文章が綴られる。これはいいなあと思いました。『ほほづゑ』に原稿が書けるのもこれがあるからです。(笑)

副島 私は今でも原稿用紙に鉛筆で書いています。これは偉くもなんともない、遅れているだけです

から今日本には何もない」と言っています。そういうふうには日本の悪口を盛んに言うのですが、その実日本が恋しくてたまらない(笑)。

澁澤 私も小学二年から大学まで海外にいましたから、「日本」という意識が、日本国内の生活で感じる場合とは違った意識が身に付いたと思っっています。例えば、私は常にアメリカ人社会の中にポツンと一人でいて、周りは白人社会。そうすると、私は常に「日本の文化」「日本の食べ物」「日本の習慣」を説明しなければならぬ立場でした。だから、余計に日本を知りたいと思っていましたね。

副島 澁澤さんは海外のご経験が長いので、そのあたりの肝心なことが分かっておられますね。外国人の一番の関心は、「日本のことが知りたい、日本のことが聞きたい」ということですからね。

澁澤 そういう時、「やられた」と思うことは、日本の歴史的なことや伝統文化のことなどを、逆に「このことはこうなのだね」などと聞かされたとき

(笑)。ただ、携帯のメールは相手の時間を拘束することなく自在に送れるので使っていますが、パソコンはまだです(笑)。

澁澤さんが広い視野で聞いて下さるので、気になっていった日本のおかしなお話をしてみたいと思いますが。……私の郷里は九州の佐賀です。縁者は誰も居なくなりましたが、代々のお墓がありました。禅宗のお寺で、二十代余のお墓が並んでいました。

縁者がいなくなつたものだから、もう十年くらい前から誰もお詣りしていませんね。それで、東京のお墓に持ってこようということになり、お寺に相談したところ「いいですよ」ということで、移すことにしました。ただ最初の頃は火葬ではないので焼骨してもらい、十九柱の遺骨を移しました。それで運ぶ手段はと聞くと、宅急便でということ、きちんと届けていただき、こちらのお墓に入っています。それでもう一つおかしなのは、郷里の菩提寺は禅宗なのですが、こちらのお寺は浄土真宗の大谷派な

のではないでしょう。日本は昔から農耕民族と言われているのですが、日本型農耕民族という見方があるのじゃあないかと思えます。それは、水が豊かだということ。海から雲が流れて来て山に当たり、ふんだんに雨を降らして流してゆく。どんな渇きでも少し我慢をすれば潤してくれる。だから我慢が美德になるし、いざこざが起きても水に流そうよということになる。一方、大陸の農耕民族は水の確保が大変で、上流は他の民族や国がもっているかも知れない。水の確保から始まっていさかいが生じるといふこともあったでしょうし、そういった日本の気候風土の特質が、日本のおおらかな宗教観にも出ているのじゃあないでしょうか。

国際社会と日本―「結界」を超えて

副島 今日、もう一つお話をしたいと思っていたのは、神様のこと、神事に関する事なんです。日本の国技の相撲に関わることで、内館牧子(一九四八

んです。それで宗派が違うのだがと尋ねたところ、「いえ構いませんよ」ということでした。このあたりは、日本の仏教というのはおおらかというか、現実的というか、宗派の違いをあまり気にしていないんです。そういうことがあります。日本という国は面白い国だなと思いました。

澁澤 日本人は宗教に関して、大変おおらかなところがあるんですね。

副島 以前『ほほづゑ』に掲載された「日本の仏教」に書きましたが、宗教というものは、伝播して布教してゆく過程で、その国の風土・慣習と容易に一体となるものなのですね。

キリスト教でも、遠藤周作(一九三二―一九九六)さんが書いた小説「沈黙」の中で、渡来した宣教師が苦勞して布教し、少しずつ信徒が増えて喜んでいると、その実、日本人はキリストの顔をした自分たちの神を拜んでいた、というくだりがありますね。

澁澤 それはこの国の気候・風土と大いに関係する
 ー)さんという作家がおられますが、この人は以前、横綱審議会の委員をしておられました。その任期中の大阪場所、優勝力士への表彰の折、当時の太田房江大阪府知事が知事賞を自ら土俵に上がって手渡したいと言われたことがありました。相撲協会はこれまでの伝統戒律に基づいて、「ご遠慮願いたい」という立場を貫きました。ところが多くのメディアは、太田知事を支持し、伝統にこだわる相撲協会に反対したのです。内館さんは協会側の立場を支持して、「なぜ女性は土俵に上がれないのか」という問題提起をして、論陣をはりました。その折の賛否両論は大変な話題になりましたが、彼女はその後東北大学大学院に籍を置いてこの問題を研究し、修士論文『神事にみる相撲』を著わされました。内館さんの結論は、「日本には一定の区域に限って、修行の邪魔になるようなものは入れない(結界)」という考え方が。例えばお寺の内陣・外陣とか、高野山や比叡山の女人禁制とか、仏教でもそういう

考え方がある。それが〈結界〉であって、相撲の場合も、土俵には二十俵の俵があるが、その二十俵は〈結界〉を形づくっている。さらにその周りには四本柱があつてしめ縄が張つてある。その内側には力士、行司など男の関係者以外は入つてはいけないということになつてゐる。神事に關する伝統については、いたずらに触れない方がいい。乱れて榮えるよりは、固く守つて滅びよ。」要約するとこういうことになるのです。こんなところが日本にはあるんですね。

私は、お寺に女性を入れないのも、土俵に女性を上げないのも、実のところは、女性がチラチラすると若い僧や力士の修行の邪魔になる、ということなのだろうと思ひますがね。(笑)

澁澤 相撲界の「結界」ということでいうと、近年外国人力士が増えていますよね。何時頃から許されるようになったのですかね。それとも同じ男ですから「結界」外のことですかね。

澁澤 そうですね。水は豊富だし、山海の産物も豊かだったでしょうし。

それで、先程の「大正時代の豊かな日本」のお話に戻りますが、今現在にしても、二十年来の不況といつていますが、豊かですよ。そうすると、次の時代のことを考えると、この豊かさというものがマインナスの面に出なければいいかと思ひますが。

副島 澁澤さんくらいの年代までは、昔の日本の豊かさが頭に入つてゐるし、今の日本の状態が良くも悪くも認識出来てゐると思ひますが、ただもつと若い人たちにその辺の理解があるかどうか、これは問題だと思ひますよ。

澁澤 今から二十年、三十年、四十年後の主役になるのはどの世代かというところ、団塊ジュニアと呼ばれてゐる三十五歳から四十歳くらいの人たちなんですよ。三十年後の時代ではこの世代の人たちの人口が最も多いのですが、大人になつて高度成長を経験してゐないんですね。バブル経済の真つただ中に大学

副島 相撲はもともと神事ですすからね。「結界」は神代の頃からということでしょうし、外国人力士の場合は、「結界」とは無関係でしょうね。ただ、先程からお話に出てきてゐる、日本が島国であるということと関わりがありそうですね。

澁澤 島国ということですよ、イギリスも島国じゃあないですか。同じ島国ということでは日本とイギリスはよく比較されますが、明確に相異がありませんよね。イギリスの場合、異民族の侵攻、大陸からの、あるいは大陸への侵攻というように、歴史的にみても活発な往来がありますが、そうしたことも日本との相異点としてあるのでしょうか。

副島 日本の場合には、イギリスと較べると歴史的にも孤立感が深いですね。言い換えれば日本は恵まれていたといえるのでしょうか。四方を海に囲まれた天然の要害ですから。江戸時代は人口三千万人といいますが、この国土に三千万人ですから、ある意味豊かだったということでしょうね。

生でしたから。ですから彼らは真剣に物事を考えていますね。私たち(五十代)よりも上の世代は、考えるまでもなく引かれたレールを走つてくればよかったです。だから、この三十五歳から四十歳くらいの人たちが、これからの日本のことを確り考えて欲しいと思つてゐます。

副島 その年頃の若い人たちは、もつと海外に出て行つたらいいと思ひますよ。私たちの世代は戦争が終つて、社会に出て、海外とはどういふものか。特にアメリカに対して強い関心がありましたね。私なんかも行きたい、行きたいと思つて行きました。今はそういう渴望のようなものはないでしょう。

今のところ日本は豊かで、暮らして行けませんが、これは幸運であつて、こういうことは今後ないかも知れない。だから、海外に出て色々見てくればいい。**澁澤** 豊かな国というところ、明治時代の日本は、外国に強い関心を持つて新しい文物を持つてきて、豊かになると、外国を排除するというのじゃないにして

も、無関心で内向きになってしまふ。その結果戦争になり、やがて焦土から立ち上がって外国とも交流して豊かになり、また内向きになる。この先にまたリスクがあるのじゃないかと危惧しています。

副島 次のリスクは必ずあると思いますね。若い人と話していると、日本は文化的にすぐれている。中国と較べれば人口は1/10で、中国と経済力を較べようとは思わないけれど、世界でトップクラスの技術が幾つかあればそれでよしと、そんな国でいいんじゃないですか、と言う人がほとんどですよ。

この間、ビンラディンがパキスタンでアメリカの特殊部隊によって殺害されましたが、あれはパキスタン政府当局には知らされてなかったようです。国家としては困ると思いますよ。私は別にナショナリストではないけれど、あれはパキスタンに力がなからですよ。国力がないからああいうことが平然と行われるんですよ。

だから、ある程度国力がなければだめですよ。今

なるのか、どうならなければならぬのか、一緒に模索してゆかなければなりませんね。

澁澤 我々日本人には「底力」があるのだということに、気づかなければいけませんね。つまり「自信」ということなのでしょうが、これは国内だけでは分かりませんからね。

副島 澁澤さんは海外を知っておられるからお分かりだと思えますが、外国人と話をして、彼らが日本をどう思っているのか。どういうことを日本人から聞きたがっているのかということ、若い人に知って欲しいですね。

澁澤 先週もワシントン、ニューヨークに行ってきたのですが、日本へのパッシング（素通り）はなく、むしろ心配してくれて、日本のことを知れたがっているし、心配しているのに、どうもそれに応えていないのではないかと思いますね。

副島 日本は外交下手というか、付き合い下手ですね。そのいい例が中国と韓国とのことです。もう

日本の人口が一億一千万人でしょう。今後どんなに減っても八千万人を下ることはありませんよ。いまドイツが八千万人でしょう。イギリスとイタリアが六千万人くらいですから、日本はまだまだ大国ですよ。だから、そんなに萎縮することはない。自分から戦争を仕掛けるような馬鹿をしちゃいけないし、軍部を作るようなことをしちゃいけません。毅然として、力を持った国でないと駄目だと思いますよ。

澁澤 平和というものは自然現象じゃあなくて、作り上げていかなければなりません。平和を作るためには、その背後に力がなきゃなりませんからね。

副島 その力というのは軍事力ということではなくて、他国から敬意を払われるようなことではないか。その力とは一体どのようなものなのか。大事なことです。

澁澤 それは詰まるところ、「民力」、民の底力ということになるのじゃないでしょうか。

副島 我々も一生懸命考えますが、今後日本はどう

ちよつとうまい付き合い方があるのだろうと思いますがね。

澁澤 おそらく、発言のタイミングの問題もあるのだろうと思いますよ。先方としたり考えられないようなタイミングで言われて困惑するというようなこともあるのだろうと思います。

それと、国と国とのやりとりというのは、お互いの言い分を相互に出し合うということなので、それが、国という場合でもお互いに一枚岩ではなくて、それぞれの国にはいろいろな価値観があるのですから、一人ひとり、一人ひとりがそれなりの関係を築くことによって、総じて国同士がお付き合いできるのじゃあないかなと思いますけどね。

副島 それはね、ヘッジファンドがいくら国際的に暴れても、結局国というものは簡単にバラバラにはならないと思うのですよ。一種のナショナリズムなのですがね。

澁澤 パトリオティズム Patriotism（愛国心）という

言葉があるのですが、日本で愛国心などと言うと、誤解されてしまいそうですが、外国では愛国心などということとは当たり前のことですからね。

副島 ドナルド・キーン（一九二二—）というアメリカ出身の文芸評論家がおられますが、このほど日本に帰化されました。あの人は面白い人で、司馬遼太郎（一九二三—一九六〇）さんと対談しているのですが、『日本人と日本文化』中公新書一九七二年、その中で、一休禅師（一三三八—一四八一）に触れて、当時偉い坊さんがたくさんいて、中国から禅の法語や漢詩を学んだ五山文学が盛んであったが、キーンさんは五山文学の漢詩よりも、一休が晩年連れ添った盲目の少女・森侍者（しんじしや）のことを詠んだ詩の方がよく判るし、ずっと良いと言っているんですね。

それから三月十一日に地震がありましたね。そのことについても他の機会に述べていますが、被災地の日本人の言動を見ていて、「私はこういう人たちと一緒に生きて、一緒に死にたい」と思って日本へ

の帰化を決めたというんですね。こういう日本の捉え方もあるんですね。

澁澤 ありがとうございます。それでは最後に「次代へのメッセージ」をいただけますか。

副島 ラインホルト・ニーバー（一八九二—一九七二）というドイツ系アメリカ人の神学者がいますが、その人の言葉を、これからの日本を担ってゆく若い人たちに伝えたいと思います。

神よ われらに与え給え

変えることのできないものを

受け入れる冷静さと素直さを

変えるべきものについては

それを変える勇気を

そしてこの両者を識別することのできる智恵を

（そえじまあきら／しぶさわけん）

〔収録・二〇一二年十月四日〕